「新大久保」の誕生 ——雑誌が見た地域の変容——

The Birth of “Shin-okubo”:

Looking into Magazine Articles on Okubo District in the Past Three Decades

申 惠 媛
SHIN Hyewon

Since the 2000s, part of the Okubo district, where many foreigners inhabit, has become a tourist spot as a Korean town, and come to be referred to as “Shin-okubo”. We assumed that this new tourist spot is different from Okubo itself, which had often been studied as a residential area and as a multicultural co-existing place. Therefore, in this paper, we analyzed how “Okubo” and “Shin-okubo” were described in magazine articles from 1986 to Sep. 2015. As a result, we found that although “Shin-okubo” stems from physical Okubo where many Korean shops exist, at the same time, it is currently separated from Okubo because of its unique image that has been formed by tourists and the media. We therefore suggest a more holistic perspective on this space, “Okubo/Shin-okubo” area.

1. 問いの所在：「新大久保」登場以降の大久保地域を考える

東京都新宿区は、もとより確認されていたオールドカマー⁽¹⁾の人口に加え、1980年代以降急増したニューカマー人口の流入先となり、今日に至るまで多くの外国籍人口を抱えている。なかでも大久保地域⁽²⁾では、2015年1月1日現在、大久保地域全体人口の約4分の1に当たる11,515名が外国籍人口となっている⁽³⁾。その数の多さのみならず、当該地域における外国人住民の多様性・流動性の高さ⁽⁴⁾も特徴的であり、大久保地域はこれまでも多くの研究の対象となってきた。

これらの研究の多くは、主に地域で生活する外国人住民に焦点を当て、その現状や彼らおよびその受け入れ先が抱える課題を取り上げてきた。たとえば奥田・田嶋 [1993] や奥田・広田・田嶋 [1994] は新宿に住むアジア系外国人居住者を中心に行った調査に基づいて大都市インナーエリアにおける共生の作法について考察した。奥田らの研究をはじめとして、新宿区や大久保地域はその「多文化共生」⁽⁵⁾状況が取り上げられることが多く、この場合、地域における特定の活動や施設、市民団体が注目されたり [川村編著1998；久場2004；大野2014など]、当該地域のニューカマー韓国人に焦点が当てられる傾向にある [李2008；朴2014など]。

また、地域・都市社会学等の立場から外国人集住地域の一つとして大久保という地域そのものに焦点が当てられることもある。たとえば広田 [2012] によって都市エスニシティ論として位置づけられる一連の研究では、「外国人労働者と彼らを地域で受け止めた人々が織り成す世界」 [広田2012：143] として大久保地域を照射することが可能になる。更に、大久保地域の歴史的変遷をたどりながら当該地域で生活する外国人とそれを受け入れてきた地域の生みだすダイナミズムを追いかけてきた代表的な研究として稲葉 [2008] が挙げられる。

これらの研究において大久保地域はしばしば多文化共生の現場、外国人集住地域として描かれており、その多くは生活上で生じる「共生」の問題——ゴミ出し問題、借家関連のトラブルなど——を中心に当該地域の状況を描き出している。

しかし、一旦こうした住民同士の「共生」状況から目を転じ、実際に大久保の街を歩いてみると、近年の大久保地域に特徴的な現象が見えてくる。まるで観光地のように消費されるコリアンタウン⁽⁶⁾「新大久保」の登場である。JR山手線新大久保駅を出てすぐから明治通りに至るまでの大久保通りと一本向こうの職安通りという二つのストリートを主軸とする一帯が、近年「新大久保」と名指され、コリアンタウンや韓流の聖地と呼ばれて消費されることでいくらか観光地化の様相を呈し賑わっている。2011年にはJR新大久保駅の乗車人員数合計が42,433名と前年の37,344名から大きく増加するなど実際の来訪者も増え⁽⁷⁾、東京案内の観光ガイドブックにおいても新宿エリアの観光地として「新大久保」が取り上げられている（『まっぷる東京'16』2015.4.15：118-125など）。

このような「新大久保」の観光地化の様相は、どのように捉えられてきたのだろうか。一つには、前述のように大久保地域を多文化共生の現場として捉えてきた諸研究からの視点が挙げられる。この場合、観光地化した「新大久保」はあくまでも大久保地域の一部であるとみなされるか、大久保地域に起きた変化として捉えられ、取り立てて「新大久保」という呼称は用いられない傾向にある。しかし、このように従来の大久保地域と観光地化した「新大久保」を連続的に捉える見方では、「新大久保」登場以降の大久保地域を正確に捉えているとは言い難い。大久保地域に住む外国人の生活を支えるためにエスニック系店舗⁽⁸⁾が集積していった過程と、地域内外を問わず訪れる日本人観光客を主な顧客とする現在の観光地「新大久保」を全く同一のものとしてみなすことはできないからである。

一方、より時期を新たにして、「新大久保」により焦点を当てた研究も見られるようになった。たとえば姜〔2011〕は、「新大久保」の歴史を振り返りつつこれを都市観光地の一つとして取り上げている。また、「新大久保」がコリアンタウンとして一躍有名になったことを受け、韓国のほうでもそのエスニック・タウン、観光地らしい側面を取り上げる研究〔Iwama 2008; Lee 2011; Yim & Lee 2013など〕が見られるようになった。これらの研究の多くは、対象地域を大久保地域ではなく「新大久保」と呼び、その観光地性に注目していることが特徴的である一方で、正式な地名とはいえない「新大久保」という呼称を用いた理由については明確に言及されないという疑問も残る。もし単にコリアンタウンや韓流の聖地としてメディア等で頻繁に用いられる呼称であるからという理由であれば、従来の研究において大久保地域として説明されているものが「新大久保」と名を変えられたにすぎない可能性がある。しかし、一般にマルチエスニックであるとされる大久保地域〔稲葉2008など〕とコリアンタウン・韓流の聖地を指すことの多い「新大久保」は果たして同じものを指す呼称といえるのだろうか。ここにおいても、大久保地域と「新大久保」を連続的に捉える見方が採られたために同様の問題が生じていると考えられる⁽⁹⁾。

つまり、大久保地域を多文化共生の現場として取り上げた研究においても、観光地性に注目して「新大久保」を取り上げた研究においても、また「大久保」と「新大久保」のどちらの呼称を用いた場合においても、両側面は同一あるいは同一線上のものとして捉えられてきた。そしてこのために、「新大久保」の登場とその影響が十分には論じられてこなかったのではないだろうか。

本稿の狙いは、このような状況を打破し、「新大久保」登場以降の大久保地域を正確に

捉えることである。したがって本稿では、今日の大久保地域が持つ多文化共生の現場としての側面と「新大久保」と呼ばれることの多い観光地としての側面を一度切り離してそれぞれの特徴を見ていき、両者がどのような関係にあるかを探る。そのための手がかりとして、本稿では「大久保」と「新大久保」という呼称の二重性に注目する。この二つの呼称は、多文化共生の現場か観光地かというようにどちらの側面により注目するかによって選ばれてきたと見受けられるが、これらが何を指し、どのような関係にあるのかについて言及した研究は管見の限り見当たらない。

したがって本稿では、まず第2章において「大久保」と「新大久保」がどのように区分されうるかについて雑誌分析を通じて検討し、続く第3章では両者の関係性について考察する。このことは、従来の研究に「大久保／新大久保」地域という視座を提供し、「共生」の枠組みで見落とされてきた部分を照射することにつながる。

2. 雑誌分析

(1) 雑誌分析を行う理由

「大久保」と「新大久保」の二重性を見ていくため、本稿では雑誌分析という手法を用いる。従来、大久保地域を対象とする研究の多くが当該地域における住民同士の「共生」状況をはじめとする生活の側面に注目してきたこと、そのためにフィールドワークや関係者へのインタビューなど地域の内側から地域を記述する方法が主に取られてきたことを踏まえると、地域「外」のまなざしとして考えられる雑誌記事を用いて地域のあり方に迫るという方法は的外れなようにも思える。

それを踏まえてなお、本稿で雑誌分析を用いる理由は、「新大久保」が持つ観光地性にある。もちろん、ここで観光地化を可能にしている物理的な装置としての韓国系店舗等は地域内にあるものであり、それらが形成された経緯が地域の状況と歴史に由来するものであることは言うまでもない。しかし、近年の「新大久保」におけるエスニック・ビジネスの場合、その初期段階とされる同胞向けビジネス〔樋口編2012〕のみが見られるのではなく、エスニック・コミュニティを形成するものとして説明〔奥田・広田・田嶋1994〕可能な範疇には収まらない様子である。「新大久保」における主要な提供財・サービスには食材や同胞のためのビジネスのみならず韓流スターやK-POPアイドルのグッズなども含まれるようになり、その顧客の多くはホスト社会の人々、つまり日本人であるからだ。更にその多くは、大久保地域で居住・生活しない、つまり地域「外」からの来訪者であると考えられる。

だとすれば、この観光地「新大久保」とそれを抱える今日の大久保地域を見ていくに当たって「外」のまなざしである雑誌を分析対象として用いることは可能であるばかりか必要なことではないだろうか。「新大久保」がいくつかのブームを機にメディアでコリアンタウン・韓流の聖地と紹介されることで認知度を高め、更に消費者を集めてきたのだとすれば、雑誌をはじめとするメディアの記述は「外」のまなざしを反映しているだけでなく、「外」から来訪する消費者たちの手引きとなり「新大久保」の形成を担っているだろうことも予想されるからである。

(2) 雑誌から見る「大久保」と「新大久保」

このような理由から、本稿では「大久保」と「新大久保」がそれぞれ雑誌記事上でどの

図1 「大久保」関連記事件数の推移

図2 「新大久保」関連記事件数の推移

図3 「大久保」関連記事主な傾向の推移

図4 「新大久保」関連記事主な傾向の推移

ように描写されているかについて、発行年・描写内容・記事内で取り上げられる地理的範囲などの差異に注目して分析を行った。具体的には、一般誌・大衆誌を多く所蔵する大宅壮一文庫のデータベース「Web OYA-bunko」を利用し、1986年から2015年9月まで⁽¹⁰⁾の雑誌を対象に「大久保」(地名)および「新大久保」(地名)の件名キーワード検索⁽¹¹⁾を行い(以下、該当記事をそれぞれ「大久保」関連記事、「新大久保」関連記事とする)、検索結果の「大久保」関連記事計74件、「新大久保」関連記事計116件、合計190件⁽¹²⁾の雑誌記事すべてを分析対象とした(2015年10月13日検索)。上の図は、記事件数の推移(図1、図2)とその大まかな傾向の推移(図3、図4)⁽¹³⁾の概観である。続く各項においては、年代別に特徴的な記述を取り上げつつ詳細に見ていきたい。

1) 1980年代・1990年代

1980年代(1986年以降)・1990年代の大久保の描写は、以下の三つの特徴を持つ。第一に、新宿・歌舞伎町との連続性。大久保は歌舞伎町で働く外国人女性のベッドタウンと化し、彼女たちを対象とする生活のための店舗の出現も見られるとされる。第二に、留学生の存在。大久保に「国際学友会館」があることや日本語学校が多いことに触れ、留学生街として取り上げる記事も見られる。第三に、「国際通り」への言及。1990年からは住宅地の中にあるラブホテル街とそこに立つ外国人女性の描写が増え、彼女たちの並ぶ道を「国際通り」と呼ぶ記事が見られるようになる。

記事の種類は現場のルポという形を取るものが多く、内容としては1980年代末から外国人が増え「多国籍化」した街の様子やエスニック・レストラン、エスニック系店舗の紹介と経営者(主に外国人)へのインタビュー記事が主流であり、「ディープ」「本場の味」「同胞向け」という言葉が多用されている。この辺りの外国人は「生活感」があるとの描写も

あり（『東京人』1986.4：117）、この時期の大久保におけるエスニック系店舗は外国人の生活のためのものであるという印象があったようだ。

1990年代からはエスニシティごとの緩やかな店舗のすみわけが観察されるようになる⁽¹⁴⁾。同年代後半には、それまで東南アジア系が多く取り上げられ「アジアタウン」「エスニック・タウン」等と呼ばれていた傾向から一転、中国系や韓国系への言及が増え、大久保を「コリアタウン」「リトル・ソウル」と称する記事が見られ始める。このような傾向は2000年代へと引き継がれていくが、「エスニック・タウン」と「コリアンタウン（コリアタウン）」という描写の混在は続く。

一方、1990年代の「新大久保」関連記事の多くはラブホテル街・外国人女性関連のものである。「大久保」関連記事に比べると、こちらではエスニック・レストランをはじめとするエスニック系店舗を紹介する記事の登場が比較的遅く、あまり重点が置かれていないという点が特徴的である。1991年の記事において台湾美容室などが「付帯商売」として言及されているが、日本人読者向けの紹介・案内という語り口ではない（『NEXT』1991.8：165）。店舗案内は1992年にラブホテル街や外国人女性を紹介する際の周辺の韓国料理店案内という形ではじめて登場する（『宝石』1992.11：332）。その後1993年になってようやく「新大久保エスニックストリート」という呼称が登場し、東南アジア系飲食店が紹介されている。そして「新大久保」関連記事は、1995年に「東京のアジアタウン」が空洞化した、エスニック料理の屋台が見当たらなくなったという記事（『ニューズウィーク日本版』1995.11.22：17）の後しばらく見られなくなる。次の記事が登場するのは、2000年である。

2) 2000年代

2000年代前半の「大久保」関連記事では、引き続き大久保を「多国籍」な街とする記事と「コリアンタウン」として紹介する記事が両方見られたが、2000年以降は、大久保といえば韓国街というイメージだったが実は色々な味や文化を体験できる（『宝島』2000.8.30：53）というように、「多国籍」と「コリアンタウン」の優位性が逆転した記事が見られるようになる。この時点においても「ラブホテル街を抜け」という枕詞が用いられるはする（『PLAYBOY』2001.5：34など）が、「最近では週末になると行列のできるお店も増えてきた」（『キャンドウ！ぴあ』2001.10.23：93）という記述も見られ、観光地化の兆しが窺える。やがて2002年には「コリアンタウン」大久保は「女の子だけでも来られる明るく楽しい街に変わった」（『東京ウォーカー』2002.7.9：171）とされるようになり、外国人女性やラブホテル街への言及の減少と相まって、街はそれまでの「危険」で「ディープ」なイメージから少しずつ脱却していく。そして2000年代半ば以降、韓流ブームの到来を迎え、「コリアンタウン・大久保」は「コリアンタウン」だけでなく「韓流の街」としても描写されるようになり、街の性格が変わり始める。韓流ブームに乗って大久保の「コリアンタウン」化は加速し、この勢いは2010年以降にまで及ぶ。

1995年以降しばらく見られなかった「新大久保」関連記事も、2000年に「コリアンタウン」の名を冠して再び登場する。この記事内で新大久保は「東京最大のコリアンタウン」と形容されている（『Hanako』2000.3.1：12）が、「大久保」関連記事同様、2000年代初期には「コリアンタウン」としての記述と「(多国籍な)エスニック・タウン」としての記述が混在している。また、「新大久保」関連記事においてもこの時期から観光地化の萌芽

が見受けられるようになる。たとえば、2003年には日本人客を多く受け入れ始めた店舗が取り上げられ（『マリ・クレール』2003.8：221）、2004年にはW杯時の報道や韓国映画・ドラマのブームにより韓国料理店の数が増え、今や日本人客のほうが多い店もあるといった記述が見られるようになる（『BRUTUS』2004.4.1：31）。更に、同年4月には女性芸能人の探訪記という形で「新大久保コリアンタウン」が取り上げられている（『OZ magazine』2004.4.12：90-93）。ただし、この時点まではラブホテル街等を取り上げる記事も見られており、同記事内でも「少し怖いイメージの街だった」という発言が見られた。

しかし、2007年以降は「韓流ブーム以降、美味しい韓国料理店が増え続けているエリア」（『Pen』2007.5.1：86）など「コリアンタウン」としての描写が続き、特に2009年以降はコリアンタウンの観光案内を目的とする記事（主にグルメ、グッズ店の紹介）が非常に多くなる。このような傾向は「大久保」関連記事においても見られるが、2010年頃から記事件数の差が顕著に見られ始めることを踏まえると、この時期に韓国系店舗を中心とする観光地化が進むと共に、それを指す呼称が「大久保」から「新大久保」へと変化していったと考えられる。

3) 2010年以降

2010年以降の「大久保」関連記事の描写内容は「コリアンタウン」や「韓流の聖地」に関わるものが多く、観光案内という形態が主流となっている。このような傾向は後述する同時期の「新大久保」関連記事と類似しており、記事によっては「大久保」と「新大久保」の呼称が混在するものが見られるほどであるが、「大久保」関連記事の特徴といえるものも見受けられた。地域の歴史を振り返り、多文化共生や日本の移民政策に言及する記事（『日経ビジネス』2012.2.20：26-41）が見られたこと、引き続き「エスニック」な店舗が紹介され、歌舞伎町との連続性が言及されていたことなどである。

一方、2011年をピークに大幅な増加を示す「新大久保」関連記事は、同時期の「大久保」関連記事に比べ、新大久保がコリアンタウンや韓流の聖地として注目され、観光地化していると報じるものが多い。特に2011年には観光案内記事が激増し、いくつもの記事で新大久保が「観光地」「話題のタウン」「今日日本で一番アツい街」と形容されている。

この時期の「新大久保」関連記事に見られる特徴は次の三点である。第一に、新大久保の「聖地」化とそれに伴う新しい文化の生成。2011年以降、新大久保が「韓流の聖地」「韓流ファン・韓流好きの聖地」として描かれる傾向は更に強まり、独特の新しい文化が生成されるようになった。その一つが「新大久保発韓流アイドル」である。この「会いに行けるアイドル」（『調査情報』2011.3：49）は、同時期の「新大久保」関連記事で度々取り上げられる存在となった。

第二に、イケメン店員の存在とそれをめぐる様々な語り方。2010年時点においてすでにその存在が報じられてきた「イケメン店員」はやがて新大久保の代名詞にさえなっていく、2011年以降の観光案内記事には「会いに行ける韓流イケメン店員のいる店」（『美STORY』2011.4：176）「街で見かけたイケメンとともにご紹介」（『女性セブン』2011.4.7：101）といった謳い文句が見られるようになる。これを反映してか、新大久保を「女の欲望を満たす街」（『宝島』2011.6：36）とする記事も見られ、同年8月には「韓流イケメンに会える！新大久保ガイド」という特集が組まれた（『Saita』2011.8：123）ほどであり、この時期一部においては「新大久保」が単にコリアンタウン・韓流の聖地とはいえないも

のに変質していると見て取れる。

第三に、ファッション誌などこれまであまり見られなかったジャンルの女性向け雑誌への登場。2011年に入ると『non・no』『JJ』『セブンティーン』など比較的若い女性をターゲットとするファッション誌等において新大久保が取り上げられるようになるという傾向が見られる。それまでも女性向けの観光案内が主流ではあったが、こちらの文脈では新大久保が「ビューティータウン」といった形で紹介されるようになることに注目したい（『日経ヘルス』2011.12：60-64など）。このような傾向は、「異国街というと中華街のようでもあるが、それよりも女子度が高いのが新大久保の特徴」（『CREA』2012.3：110）という文章に特徴的に表れている。

2012年以降もコリアンタウン、韓流の聖地としての描写は続くが、同年を境に「新大久保」関連記事は急速に減少していく。2013年になると新大久保の韓流ショッピングの不況が報じられるようになり、むしろ「大久保」の呼称が主に用いられている同年5月の記事では、地域の歴史を振り返り「共生」に言及している（『週刊金曜日』2014.5.9：22-24）。以上のように、「新大久保」は2010年以降の数年間で、観光地としてのピークと一転しての不況まで、めまぐるしい描写の変化を経験している。

4) 地図上の差異

「大久保」・「新大久保」関連記事の双方において、店舗紹介を目的とする地図の使用が多々見られた。これらの地図が示す範囲はいずれも大久保通りと職安通り、JR大久保駅・JR新大久保駅と明治通りを四辺とするエリアに概ね限定され⁽¹⁵⁾、地図ごとに特に注目されるエリアの推移は上述の描写内容と連動している⁽¹⁶⁾。

しかし、それぞれに掲載された地図には差異も見られた。まず、JR大久保駅が「大久保」関連記事の地図には度々登場する反面、「新大久保」関連記事の地図にはあまり登場しない。加えて、大久保通りのJR新大久保駅周辺が注目されるようになった時期と、雑誌記事事件数の変化からコリアンタウン・韓流の聖地として観光地化したエリアが主に「新大久保」と呼ばれるようになったと推定される時期が近いことを踏まえると、それぞれの呼称が駅名の影響を受けている可能性が推察される。

5) まとめ

以上の推移と特徴は下表1のようにまとめることができる。

ここから、従来の研究において同一あるいは同一線上のものとして位置づけられること

表1 「大久保」・「新大久保」関連雑誌記事における差異

	「大久保」関連記事	「新大久保」関連記事
年代特徴	2000年代までが相対的に多い	2010-2012 年が最も多い
描写範囲	・ 比較的広範囲の様子を描写する傾向 ・ 「裏新宿」「裏歌舞伎町」など新宿・歌舞伎町との連続性が度々言及される	・ JR 新大久保駅側（JR大久保駅は省略傾向） ・ 職安通りよりも大久保通り、間の小路（イクメン通り等）が注目されることが多い
描写傾向	「ディープ」「危ない」「生活感」 →観光地化の進展・「新大久保」との混同 →観光案内の他、地域の歴史を振り返る記事も	「国際通り」関連の記事が多い →コリアンタウン・韓流の街（観光地） →女性のための観光地（→不況）
特徴	・ 韓国系以外のエスニック系店舗の紹介も ・ 生活空間としての描写や「多文化共生」関連記事（関係者へのインタビュー等）も	・ 韓国系店舗に特化する記事が多い ・ 韓流≧コリアンタウン ・ 観光ガイド記事、より煽情的な描写が多い ・ 女性向け雑誌（ファッション誌等）に登場

の多かった「大久保」と「新大久保」は、雑誌記事上においても混同されたり、類似性を示すこともあるものの、地理的・性質的にいくらか異なるものであることが明らかになった。特に、2010年前後からの「新大久保」関連記事の多さと描写の特徴がこの時期の「新大久保」の異質さを際立たせている。「大久保」が従来の研究で記述されてきたような生活空間・多文化共生の現場としての側面を持つものとして認識されてきたと考えられる一方、「新大久保」は「大久保」の持つエスニック・タウン要素や「生活感」を捨象し、独特の賑わいと煽情性を持つ観光地として登場してきたのである。

3. 考察

しかし、「大久保」と「新大久保」は、単純に全く異なるものを指しているとは言い難い。これまで見てきたように、「新大久保」は地理的に大久保地域の一部として位置づけられるだけでなく、歴史的にもこれを地盤としているからである⁽¹⁷⁾。つまり、「大久保」と「新大久保」は地理的・歴史的に連続的でありながら、観光地化を経て「新大久保」が「大久保」と区別される独特なイメージを持つようになったと考えられる。これを図示すると下図5のようになる。

行政区分に基づく地理的範囲として大久保地域を置くと、生活空間・多文化共生の現場として認識される傾向にある「大久保」は同一平面上に、「新大久保」はその一角に形成された韓国系店舗集積エリアとして位置づけられる（図5の斜線部）。しかし、韓流・K-POPブームを機に観光地化した「新大久保」は、観光客やメディアといった地域「外」の人々によるまなざしと消費行動によって「大久保」とは区別されるイメージを持ち始める。生活空間・多文化共生の現場としての「大久保」を地盤としながらも直接にはそれと接しないような、観光地イメージからなる「新大久保」が位相を異にして形成されてきたと考えることができるのである（図5の半球）。地域「外」の人々は、こうして生活の側面に関わることなく「新大久保」を消費し通り抜けていく（図5の矢印）。

つまり、「新大久保」登場以降の大久保地域——「大久保／新大久保」地域は、生活空間・多文化共生の現場という側面を持つ「大久保」、その一角に形成された韓国系店舗の集積エリア「新大久保」、それを接続面として独特のイメージを伴って立ち上る観光地「新大久保」という三つの場が共在する空間として描き直すことができる。それぞれの場を見ていくと、「大久保」においては外国人住民の継続的な転入・転出が、韓国系店舗の集積エリアとしての「新大久保」においては店舗の入れ替わりの速さが、観光地「新大久保」においてはこれを消費し通り抜けていく観光客やメディアという地域「外」の人々の流れが見られる。これらは、それぞれの場において葛藤や軋轢を生みながら互いに連関し合い、

図5 「大久保」と「新大久保」の関係性

ひとつの空間としての「大久保／新大久保」地域をなしているのである。

4. 「大久保／新大久保」地域という視座

それでは、以上の試みは、従来の研究にどのような示唆を与えられるだろうか。

注目すべきは、これまで見てきたように、「新大久保」の登場は必ずしも当該地域における外国人住民の存在によるものではないということである。しかし、主な消費対象が韓国系店舗であるがゆえに、「新大久保」はしばしば「大久保」と同一あるいは同一線上のものとされ、多文化共生・外国人集住地域の問題に引きつけられて論じられてきた。その理由は、大きく二つ考えられる。一つは、在日外国人を対象とする研究の多くが、外国人やその受け入れ先の活動・実践を重点的に取り上げてきたこと。もう一つは、より地域に注目した研究であっても、対象地域を「居住を軸として広がる一定範囲内の社会関係と空間」[森岡2008:22]としての「地域社会」として見てきたものが多いと考えられることである。このために、従来の研究では居住地・生活空間としての地域「外」の人々と強く関連を持つ観光地化の現象があまり注目されてこず、観光地化した「新大久保」のイメージが次第にひとり歩きするようになり居住地・生活空間としての地域から剥がれ始めたこと、またそれが地域にもたらす影響が見落とされてきたのではないだろうか。

本稿で提示した「大久保／新大久保」地域という視座は、近年この地域に見られるこのような現象を包括的に説明するに当たって有効である。前述のように、「新大久保」の登場は、従来のような住民レベルでの人の移動のみならず、店舗の入れ替わりの速さや観光客・メディアの出入りといった新しい人の移動を招来した。このことは、大久保地域ではなく「大久保／新大久保」地域という視座を採るとき、当該地域を構成する人々が必ずしもそこに居住・生活する者に限られなくなったことを意味する。言い換えると、これまで地域「外」の者であると考えられ議論の俎上に載せられてこなかった観光客やメディアを含め、当該地域において活動する人々全体がその構成員として考慮される必要が生じていると考えられる。このような視座を採ることで、生活空間の側面に注目し、地域住民——往々にして日本人住民／外国人住民に二分される——や自治体などを主な構成員としてきた従来の「共生」の枠組みでは見落とされてきた部分を拾い上げることが可能になるだろう。

このように考えると、本稿で用いた雑誌分析という手法は「大久保／新大久保」地域を見るに当たっては適切であったことがわかる。雑誌は地域の変化を記述していたというより、雑誌の言説もまた地域の一部（構成要素）となっていたと考えられるからである。本稿では、そのような意味でのイメージの生成を「観光地化」の中に読み取る可能性を提示したといえる。

最後に、本稿の限界と今後の課題に触れておく。本稿は1980年代以降の大久保地域という限定的かつ特殊な単一事例を対象としており、外国人集住地域あるいはエスニック・タウンとされる他の事例については更なる調査・研究が求められる。また、本稿の分析はGordon [1964=2000] などエスニック集団間関係を対象としてきた諸研究の再考にもつながると予想される。「新大久保」は、今日ますます多様化する移民を捉えるためにはこれらの研究においてしばしば取られてきた居住・定住という前提に再考の余地があることを示す事例としても考えられるからだ。今後はこのような観点からも研究を深めていきたい。

註

- (1) 「オールドカマー」とは「特別永住者の在日コリアンとそれと比べれば少数の在日華人、および、ここは議論が分かれるところであろうが、日本国籍を取得した元・特別永住者」を指し、「ニューカマー」とは1980年代後半以降来日した者を指す〔五十嵐2013：304〕。
- (2) 新宿区役所大久保特別出張所管内の地域を指す。大きくは新宿6・7丁目、歌舞伎町2丁目、百人町1・2・3丁目、大久保1・2・3丁目とされる〔新宿区新宿自治創造研究所2013：31〕。
- (3) 新宿区多文化共生推進課に問い合わせご提供いただいた資料に基づく（2015年8月7日提供）。
- (4) より広く新宿区の外国籍人口の特徴ではあるが、新宿区新宿自治創造研究所〔2011〕からは多様性の高さが出身国のみならず在留資格や居住年数などにも及ぶことが窺える。また、流動性の高さは、2008年から2010年まで毎年新宿区内の外国人の約3分の1が転入・転出しており、このような傾向が最近のことではない〔新宿区新宿自治創造研究所2012：9〕ことから窺える。
- (5) 「共生」「多文化共生」は共に定義が曖昧な語であるが、本稿は移民研究や地域・都市社会学のエスニシティ研究を先行研究とするため、これらの語を主に異なるエスニック集団間関係の側面に限定して用いる。また、本稿は小内〔2007〕のいう存在論としての立場を取る。小内の言葉を借りれば、これは「共生の形態と機能、いいかえれば共存の形式と機能が焦点に据えられる」ものであり「多文化共生を例にとると、異なる文化をもつ民族の共存の形式と機能を検討すること」〔小内2007：5〕である。
- (6) コリアンタウン、エスニック・タウンの定義について、本稿ではさしあたり「あるエスニック・グループが集住したり、ネットワークを形成していること、場を『エスニック・コミュニティ』と呼び、より商業的に表象されたり、公的な地区として登録された場を『エスニック・タウン』」〔朝日2009：328-329〕とする。ただし、雑誌記事上の描写等に倣ったものについてはその限りではない。
- (7) JR東日本各駅の乗車人員（<http://www.jreast.co.jp/passenger/index.html>、2015年11月6日取得）による。新大久保駅が公開されている2000年以降の推移を見ると、例年ほぼ横ばいで3万3千～3万7千名程度であったが、2011年に4万超へと急増、以後は緩やかに減少している。
- (8) この表現は稲葉〔2008〕の「エスニック系施設」に基づく。稲葉は、(a) そのエスニック集団独特の商品やサービスを扱う施設、(b) 日本語力が未熟な外国人を対象に商品やサービスを提供しようとする施設、(c) 看板や表札等により、その存在が市街地空間において可視化された施設、という(a)～(c)の条件のうち「(a)、(b)、(c)」「(a)、(c)」「(b)、(c)」のいずれかを満たすものを「エスニック系施設」と定義している〔稲葉2008：80-81〕。これには日本語学校なども含まれるが、本稿では特に商業を主とするものを「エスニック系店舗」として想定している。
- (9) Lee〔2011〕は対象とする「新大久保地区」を行政区画上の大久保地域と区別してその地理的範囲を明確にしたうえで「新大久保」の登場に伴う地域の変化を追っており、このような問題点を最も解決していると考えられるが、この地域を「新大久保」と呼ぶ理由は明確ではない。
- (10) 日本においてニューカマー外国人の増加が見られた時期が1980年代以降である〔奥田・広田・田嶋1994〕ことと利用したデータベース（Web OYA-bunko）の制限上、1986年以降とした。
- (11) 件名キーワード検索とはWeb OYA-bunkoにおける検索方法の一つであり、「事件名や会社名、様々な事物の名前などから検索」するもので、「同一名称の異なる事物も区別して検索でき」ることが特徴である（<https://www.oya-bunko.com/help.html#keyword>、2016年4月8日取得）。今回の雑誌分析では、こちらの件名キーワード検索にそれぞれ「大久保」と「新大久保」を入力し、表示された候補のうち「大久保⇒〔東京・各地各所〕新宿区」および「新大久保⇒〔東京・各地各所〕新宿区」を選択、検索した。本稿では、「大久保」と「新大久保」の差異に注目するという目的上、フリーワード検索等では（特に「大久保」の場合）人名など直接関係のない記事が多数含まれてしまうことを避けるためにこの件名キーワード検索を使用した。ただし、件名キーワード検索の際のキーワード分類は大宅壮一文庫によるものであり、分析対象記事が一定の限定性・恣意性を帯びてしまうことは否定できない。
- (12) うち3件は「大久保」「新大久保」の両方で検索されたため、両方の記事件数に計上している。
- (13) ここでは図中に挙げた8つの項目を設定し、各雑誌記事のタイトル（Web OYA-bunko件名キーワード検索から得られた検索結果の「タイトル」欄に表示されるものを指し、同欄の副題、「※」以下の

要約を含む)に各項目に当たる言葉またはそれらを類推させる言葉が含まれる件数を項目ごとに集計した。一つのタイトルが複数の項目に該当する場合は該当する項目すべてに計上しているため、項目内訳の合計は全体記事件数を上回る。なお、タイトルだけでは判断し難い記事については本文を参照し、主な傾向として考えられる項目一つ以上に計上した(「大久保」関連記事12件、「新大久保」関連記事10件)。個々の項目の範囲は非常に緩やかに設定しているため、以下にその補足を記す。「エスニック・多国籍・アジア関連」については、項目名に含まれる単語以外に、韓国単独ではない外国の料理店・食材店等の紹介や「外国人」の増加といった表現も計上した。「風俗・ラブホテル関連」には、ラブホテル街やそこに立つ外国人女性を扱った記事が主に該当する。「コリアンタウン・韓国関連」については、項目名に含まれる単語以外に、外国やアジアという表現ではなく韓国料理店として店舗を紹介するなど韓国のみ言及している場合は計上している。「韓流・K-POP」については、「ヨン様」など項目名に類すると考えられるものも計上している。「イケメン」および「コスメ・美容」については項目名通りであるが、後者については「キレイの修行」などの表現も計上している。最後に「その他」には、いずれの項目にも該当しない、または複数回登場するなど特筆すべきと考えられるものを計上している。「大久保」関連記事の場合、地域の歴史(6件)、留学生(2件)、散歩道・ロケ地(2件)、カルト(1件)、戸山団地(1件)、転落事故(1件)、書評(1件)の計14件がこれに当たり、「新大久保」関連記事の場合、KINOなど新大久保発アイドル(13件)、竹島問題・ヘイトスピーチ(4件、うち1件は他と重複)、楽器専門店・音楽(2件、うち1件は他と重複)、地域の歴史(2件、どちらも他と重複)、観劇(1件)、散歩道(1件)、街コン(1件)、LINE(1件)、カルト(1件)の計24件がこれに当たる。

- (14) 店舗すみわけの記述は実際の店舗の進出状況と連動している。稲葉[2008]の調査からは、「当初は中国・台湾、東南アジア系の店舗が新大久保駅と大久保駅の周辺に立地していたが、90年代後半に入るとJR山手線東側では、職安通りからニューカマーによるコリアンタウン化が進行し、東南アジア系の店舗は次々と韓国系の店舗に置き換わり、「90年代末頃には、韓国系ゾーンと多国籍ゾーンという2つのゾーンが形成されるようになった」[稲葉2008:88]ことがわかる。
- (15) 区役所通りや小滝橋通り、歌舞伎町などのエリアが言及されることもあるが、相対的に少ない。
- (16) この過程で大久保通りと職安通りを結ぶ通称「イケメン通り」も取り上げられるようになった。また、このような推移は実際の店舗の増減と連動している。稲葉[2008]は当該地域における「エスニック系施設」の立地について、90年代後半には「職安通りに近い地区から……やがて大久保通りを越えて施設立地が進み、2000年代には地域全域で関連施設の増加が見られたが、03年調査から06年調査にかけては、関連施設の多かった大久保西・東・北地区における増加が鈍化し、関連施設の少なかった新大久保駅北東側の増加率が高くなった[稲葉2008:84]としている。
- (17) 大久保という街が「江戸時代から新住民という『移民』によって形成され……戦後も一貫して新住民を受け入れてきた」[稲葉2008:166]こと、地域の韓国籍人口や韓国系店舗の多さが「新大久保」を生み出す要因となったことから、両者は歴史的な連続性を持つと考えられる。

文献

- 朝日由実子 2009『「エスニック・タウン」の誕生とストリート ロサンゼルスのカンボジア・タウンの事例から』関根康正編『ストリートの人類学』下巻 国立民族学博物館調査報告81: 327-365.
- Gordon, M. M. 1964 *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion and National Origins*, Oxford University Press. 倉田和四生・山本剛郎(訳編)『アメリカンライフにおける同化理論の諸相——人種・宗教および出身国の役割——』晃洋書房 2000.
- 樋口直人編 2012『日本のエスニック・ビジネス』世界思想社.
- 広田康生 2012「日本人のグラスルーツ・トランスナショナリズムと『場所』への都市社会学的接近」『専修人間科学論集』社会学篇2(2): 141-154.
- 五十嵐泰正 2013「ニューカマーとオールドカマーのせめぎあい」吉原和男編集代表『人の移動事典 日本からアジアへ・アジアから日本へ』丸善出版 pp. 304-305.
- 稲葉佳子 2008『オオクボ 都市の力——多文化空間のダイナミズム』学芸出版社.

- 李承珉 (イ・スンミン) 2008「韓国人ニューカマーの定住化と課題」川村千鶴子編著『「移民国家日本」と多文化共生論——多文化都市・新宿の深層』明石書店 pp. 111-137.
- 이와마 노부유키 (Iwama, Nobuyuki) 2008 “신오오쿠보 코리안타운의 변용과 도시관광의 가능성”, *한국 속의 일본문화, 일본 속의 한국문화* pp. 93-101.
- 姜侑競 2011「都市観光の場としての新大久保に関する考察」『동북아관광연구』7(4) (통권 15호): 43-63.
- 川村千鶴子編著 1998『多民族共生の街・新宿の底層』明石書店.
- 久場暢子 2004「『たたかい』としての多文化共生——『共住懇』の活動を中心に」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』(2): 28-33.
- 이호상 (Lee, Ho sang) 2011 “에스닉 커뮤니티 성장에 따른 지역사회의 변화: 도쿄 신오쿠보를 사례로”, *한국도시지리학회지* 14(2): 125-137.
- 森岡清志 2008「地域社会とは何だろう」森岡清志編『地域の社会学』有斐閣 pp. 21-43.
- 奥田道大・田嶋淳子編著 1993『新宿のアジア系外国人』めこん.
- 奥田道大・広田康生・田嶋淳子 1994『外国人居住者と日本の地域社会』明石書店.
- 小内 透 2007「外国人集住地域の現実と共生の視点」『調査と社会理論』・研究報告書 23: 1-13.
- 大野光子 2014「『多文化空間』における保育の在り方に関する一考察——新宿区大久保のA保育園を通して——」『社会学研究科年報』(21): 7-18.
- 朴 正義 2014『大久保コリアンタウンの人たち』国書刊行会.
- 新宿区新宿自治創造研究所 2011『研究所レポート2011外国人WG報告 (2)』新宿区新宿自治創造研究所.
- 2012『研究所レポート2011外国人WG報告 (3)』新宿区新宿自治創造研究所.
- 2013『研究所レポート2012 No. 1』新宿区新宿自治創造研究所.
- 임영언・이석인 (Yim, Young Eon & Lee, Seok-In) 2013 “한류에 대한 일본인의 의식조사——신오쿠보 코리안타운 방문자를 대상으로——”, *日語日文學* 第57輯 pp. 459-473.
- *なお、参照・引用した雑誌記事については本文を参照されたい。

(東京大学大学院総合文化研究科博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC1)